



おゆき

第二部 豊田正子

理論社刊

禁無断上演上映放送

おゆき／第二部

一九六四年七月 第一刷

定価三八〇円

作者 豊田正子

発行者 小宮山量平

東京都千代田区神田神保町一の64
発行所 株式会社理論社

電話東京五五六八／五六六九
振替口座東京九五七三六

誠和印刷・橋本製本

お

ゆ

き

／

第二部

そうてい／滝平二郎

その日、いつもより早目に仕事を切りあげた留吉は、束にしたトタンの残りや、道具類をリヤカーにつめこみ、それを自転車でひいて親方の所まで戻りかけた。今しも彼は本所の押上駅の近くまできたが、リヤカーの車輪が傷んでいて、ガタリンコン、ガタリンコンとひどい音をたてる上に、妙にひっかかってぐあいが悪かった。彼はいったん自転車をおり、リヤカーのぐあいを調べたが、すぐに直りそうもなかった。彼は「ちえッ」と舌うちし、自転車を押して歩きたした。

ここいらは光男が行方不明になったあの夜の夜空襲で、いちめん焼野原にされたところだった。あれからちょうど二年の月日が流れ去った。街路にそって新しい商店や、小さいバラックが立ち並んでいるが、ところどころに当時の焼跡らしい原っぱが家の土台のコンクリートをむきだしにしてなまなましく残っていた。そこには性の強い雑草がちらほら緑色をみせていた。整備されていない荒れた道路に、春の夕方の風が砂ほこりをまきあげていた。留吉がそのほこりに思わず顔をそむけて歩いていると、向うから近づいてきた年寄からいきなり声をかけられた。

「やっぱりそうだ。あんた秋葉さんだね、ブリキヤの……」

留吉はおどろいて足をとめた。みると、体格のほっそりした、国民服をきた六十あまりの老人で、無帽の頭は半ば白く、女のように色白で柔らかな顔つきにはたしかに見おぼえがある。は

て誰だったか、彼が思いだせないでいる間に相手が名のつた。

「あたしは浅草の平田だよ」

「うっ分った。あんれ、旦那でしたか。あんまり思いがけねえんで……」彼は目をみはり、自転車ハンドルの叩いてうめいた。

浅草の平田さんといえば、短期間ながら留吉が店をもっていた頃、かつての親方から分けてもらったわずかな得意先の一軒であった。その頃平田では日本刺繡しじゅうの工場を経営していて、小企業ながら、かなり繁昌していた。旦那も物わかりよく親切で、同じようにあいそのよい奥さんといっしょにすっかり留吉を信用して、つぎつぎ仕事をさせてくれた。金の払いは申分なく、いつか平田の仕事で自転車を盗まれた時などは、見舞金としてかなり余分な金まで出してくれたものだった。それなのに十年前、不景気のために家賃を半年以上も払えず、やむなく夜にげをして一時世間から身を隠さねばならなくなった。その時分から留吉もしぜん平田から足が遠ざかり、いっとなく縁きれの形になってしまっていた。旦那は小づくりで、色白の、かっぶくのよい、おうような人だったが、今みると、すっかり年をとって、角刈りの頭はおおかた白くなっている。かさかさに乾いた、栄養不足のやせた顔に、年よりらしいシミとシワが深く刻まれて面がわりしていたが、手入れのよい金の前歯が留吉の記憶にはっきり残っていた。

あの長い戦争といく度かの大空襲の中を、何とか生きぬいてきた知合同志が、こうして何年ぶりかでひょっこり顔を合せれば、なかなかあっさり別れられるものではない。それに平田の旦那には、特に留吉に会って話したいことがあるらしかった。彼らは風にふきよせられたように路わきへより、風呂屋の焼け跡にセメントで固めた湯ぶねの縁が、まるで細い灰色のベンチ

のように残っているのを見つけて、そこへ行って並んで腰をかけた。平田では、浅草のあの立派な住居も、工場も、空襲でまるやけになったという。ただ自分と女房、それにひとり娘が助かっただけ、まだしも不幸中のさいわいだったという。

「いや、皆さん命に別条なくて何よりでしたよ。命あつての物だねって言いますからね」

留吉は大いに同情してそう言った後、自分は住居を焼かれなかったかわりに、長男と次男の二人に死なれたことを話して、こう言いそえた。

「なんてったって、日本は負けちゃって、何もかも焼け跡になったんですからね。あたしも五十になって、これから新規しんきまきなおしてわけです。あととりの野郎がやっと小学校でたばかりなんですから、話になりませんや」

「まったくね」と平田の旦那はやや暗い、元氣のない調子で言った。「秋葉さんはまだいいよ。わたしはもうとくに六十をこえたんだからね。それでも何とか元氣を出して、一家をやしなうことを考えないことには……」

旦那はおだやかな中にも、考え深い、下ごろのありげな様子で、こまごまと現在の暮らしを話を話した。家と工場はまるやけになったが、まったくのスッテンテンになったわけではない。だから何とか都合つひして、今は三河島の町に安ぶしんながら四部屋ある平屋を作った。そして旦那と奥さんと、ひとり娘と、さらにその智ちといっしょに暮らしている。智ちというのが長年軍隊の飯をくつてきたいわゆる古参軍曹で、終戦と同時に復員してきたのを、ある知人の世話で相続人とするために結婚させた。しかし、青年時代を完全に軍隊ですごしてきた彼には、腕に何の職もなく、また商売の経験もなかった。そして復員軍人の多くがその道に入りこんだ

ように、その体力に物をいわせてカツギ屋の仲間になった。おもに千葉と東京の間を往復して、ヤミ米とヤミ野菜を扱っていた。もうけは相当にあったが、それまで堅気^{かたき}一方で事業をやってきた旦那は、自分の贅伝作にいつまでもそんな真似をさせておきたくなかった。そこで、昨年の暮、初孫が生まれたのをきっかけに、ヤミ商売をやめて、もっと将来性のある、まともな商売をやるようにすめた。伝作はわりあい素直に義父の忠告にしたがった。というのは、終戦直後のその頃は、金物類がおそろしく払底して、金物といえれば小さな銅片、針金の切れっぱし、釘少々でも高値で売れてゆき、そのために墓地から墓石にはめこまれた金属板や、囲いの鉄柵、鉄棒までがむざんに盗みとられるありさまであった。それで伝作は、何でも金物さえ扱う商売をすれば、まちがいなくボロ儲けができると考えた。じっさい、ためしに五つ六つのトタン製品を手に入れて自分でもち歩いてみたところ、忽ち相当のもうけがあった。よし、これで行く^いと決心して、彼は生まれた赤ん坊にエンギをかついで鉄男という名前をつけさえた。旦那も贅の熱意をよるこんで、できるだけ資金のくめんをしてやろうと考えた。同時に、いまの家の敷地の隅に、小さな仕事場をもうけ、誰か一人二人の職人をみつめてきて、ブリキ製品をこしらえさせよう、そして売りさばきと外交を贅にやらせて、だんだん大きな工場ももてるようにしよう、贅と二人で計画をたてた。たった今も、旦那はその職人をどこで見つけようか、信用できるいい男はないものか、と思索しながら歩いていたところだったという。

「ところが、ひよいとみると、向うから忘れもしないブリキヤさんがやってくるじゃないか。これこそほんとに地獄に仏だと思ったねえ」

そう言うてから、旦那は留吉にむかって、秋葉さんにもいろいろ都合があるだろうが、この

際ぜひ、自分たちの商売に協力して、製作の方をひきうけて貰えないか、と相手の心を動かさずにおかない熱心さで頼みこんだ。そして家の側に仕事場といっしょに、秋葉一家の住居もこしらえようとまで言うのであった。

「正直なところ」留吉は少なからず動かされて言った、「あつしゃ今の親方ってのがあんまり性があわねえんで、外にツテがあつたら止めようと思つていたんでさ。別に都合も何もありやしませんがね。まア、うちのおつかあにも相談してみます。平田の旦那に会つたつて言つたら、あいつもびっくりするでしょう」

「ああ、おかみさんもあいかわらず元氣なんだね。よろしく言つて下さいよ」

そして旦那は留吉の住所をきいて、手帳にかきつけてから、いずれ近いうちに娘髻をそちらへ行かせるから、一度よく話合つてみてくれと言つた。二人はまたじきに会うことを約束して別れた。

*

ゆきは留吉から平田の旦那に行き会つた話をきいて、おどろきもし、なつかしがりもしたが、何よりもこれでどうやら、自分たちの一家に思いがけない幸運がめぐつてきたような気がした。そして平田の娘髻がたずねてくるのを毎日熱心に待ちはじめた。

四、五日もすぎた晩、平田伝作と名のる男がやつてきた。六尺ちかい大男で、カーキ色の乗馬ズボンに、同じ色の兵隊服をきていた。大きな、白目の水色っぽい、暗い目はまぶたのまわりがうす黒くみえるほどおち窪み、血色のわるい顔色は底青かった。彼はそのぶきみな眼で留吉夫婦をじろりじろりと見ながら、この間のおやじの申し出をぜひ承諾してもらいたいと言ひ

出した。

「この仕事にかけては、自分はずぶの素人です」彼は大きな、骨ばった薄い手であぐらの片膝をぐりぐりこすりながら、いかにも癪の強そうな口調で言った。「正直いえば、トタン一枚まともに扱えやしません。だけど、自分はどうしても金物でひと儲けしたいのです。秋葉さんに協力してもらえれば、むろん仕事は秋葉さんをたよりにしてやっていくわけで、外交を自分がひきうけます。外交には自信がある。うんと取ってきますよ、仕事を。そしてね、儲けは半分のこということにしましょう。決して自分ばかりがふところこやすなんてことはしませんよ。どうです、悪くないでしょう。これでひと儲けして、秋葉さんの家を建てませんか」

留吉もゆきもこれに異存のあらうはずがなかった。殊に留吉は相手の言葉をそっくり真にうけて、現在の親方が自分をむやみに働かせるばかりで、給金の支払いさえ滞りがちなのを怒って話した。

「自分はそんなやり方はイヤだな」と言って伝作は笑った。口が大きく、歯並が尖っているのに、犬が牙をむき出したみたいだった。

「自分はそうじゃなくて、苦しみもいっしょ、楽しみもいっしょという風で行きたいな。とにかく、自分の家にくっつけて、秋葉さんたちの住むところをこしらえなくちゃ。ここから通うんじゃ、とても遠すぎて、秋葉さんがたいへんだ……」

この時ゆきが古ぼけた木の盆に、焼酎の入ったコップを二つのせたのを、亭主と客の間におきながら口をはさんだ。

「でも、今だって雨つゆしのげるところぐらいあるんでしょ。物置でも何でも……」

「しのげるってば、しのげるけど、いくら何でも物置じゃあね……」伝作はちよつと困った様子で言葉をごした。

ゆきはきっぱりした口調で、かえって客をばげますようにこう言った。

「なあに、こんな時世ですもの、雨つゆさえしのびたら、物置小屋だってけっこうですよ、ほんとに。あたしら、先ゆき見こみのある生活なら、何の二年や、三年、どんな所につもぐっていったって平気ですよ。そんなこと何でもありやしない。それより何より、一日も早く仕事の段取りをつけて下さいな。まず《仕事》だからね。平田の旦那も知ってのとおり、おやじは仕事にかけちゃ誰にもヒケはとらないが、せがれの末吉もぼつぼつ仕事を手つだうこともできるんだし、場合によっちゃ、あたしだってバケツのどつてぐらいつけますよ」

伝作は骨ばった大きな手で、焼酎のコップをくるむようにして持ちあげて、水でも呑むようにひと息にのみ干した。そして「たッ」と舌をならしながら、コップをカタリと盆において、「そう言ってもらうと自分も気が強いなあ。まったく千人力ですよ。自分もひとつ命がけでがんばりますから、よろしくたのみます」

伝作は坊主頭をはでにさげると、また鋭い歯並をむきだして笑った。留吉はさも満足そうに、何度も大きくうなずいて言った。

「ようがす。あつしも腕っこきやりますから、安心して下さいって、どうか旦那に申しつたえて下さいまし」

留吉はちよつと会釈して、自分のコップの焼酎を、伝作の空の^{かま}コップにあけてやった。それを待ちかねた伝作は、またくるむようにコップを手にとって、ぐつと一気にのみ干した。そし

ていっこう酔った風もなく帰って行った。

三八

花どきだというのに、朝から烈しい南西の風が吹きあれて、東京の空はまきあげられた砂っぽりに、どす黄いろく染まっていた。こんな日に、生き残った秋葉一家四人は、住みなれた葛飾の地から、荒川区の三河島へうつった。荷物は例の半こわれのリヤカー一台で間に合ったし、手間も半日とかからなかった。新しい彼らの住居というのは、平田の家の北側にそって建てられた、三畳ひと間ぐらいの仮小屋であった。中は細ながい土間と、板じきの床があるだけで、言葉どおり物置小屋にすぎなかった。それで平田で取り片づけた後でも、まだ旧式な糸くり機、不用な漬物ダル、こわれた古コーモリの束、乳母車、鳥かごなどが雑然と片すみにつみあげてあった。

ゆきはまず末娘の妙子を相手に、せまい板の間にごわごわした、うす緑色の、帆布のしき物を張りにかかった。妙子はもう新制中学の一年生で十四になっていたが、ややおませで、頭が機敏にばたらき、気性も明るくてしゃきしゃきしていた。しかし並はずれて小柄だった。今も妙子は母親から「あっちをひっぱれ」「こっちへよこせ」などと言いつけられるままに、小さな両腕にうんと力を入れて、帆布をひっぱっていた。どうやらそれをしきおわると、ゆきはまた妙子を手つだわせて、これまでも長い貧乏ぐらしのお供をしてきた黄色いネズミイラズや、カーキ色の毛布にくるまった二組のふとん包などを、外から運びこんだ。細ながい土間の中は

どにリンゴ箱を横だおしにして、その上に古びた鉄製のへっついと、磨きこんだニュームの釜をすえた。へっついからは留吉が手製のブリキの煙突が、小屋の板がこいをくりぬいて、斜めに表へ。この板がこいには、あちこちに大小いくつかの節穴ふしあながあつて、外の空地であそぶ子どもたちの影がちらちらし、何かの拍子で誰かがちよつとぶつかると、小屋がみしりと音をたてる始末。

栄養不良らしい青ざめた顔にうっすり汗をにじませて働いていた妙子は、いちおう荷物を中へ運びこんだ後で、さがり気味の、短かい眉と目をつりあげ、いかにも心外な、おどろいたという顔をしてきいた。

「母ちゃん、あたいたち今夜からどこに寝るの？ えッここに。こんな窓も何にもない、狭っこい小屋に、どうして四人もねられるウ？」

そういう妙子は、まさかこの小屋が新しい自分たちの住居だろうとは、冗談にも思っていなかったのだ。ゆきは例のくもった古鏡を土間の丸太の柱にかけながら、小さい子どもに言ってきたるように笑って言った。

「そうだよ。父ちゃんたちの仕事が本式になるまで、ここがまんするんだ。ちよつとのしんぼうだからな、文句いうんじゃない」

「へえー、そうだったの」

小娘は今はったばかりの床板に腰をかけて、おどろきを新たにしたという顔つきでつぶやいた。そして目をさました子どもがだんだん周囲になれてゆくように、小屋の中を見なおしながら、さらにつぶやいた。

「なあんだ、そうだったの。あたいはまた、ここは仕事の道具やなんかおく所でサ、寝るとこは別にあるんだとばかり思ってたわ」

貧乏になれた子どもは、こんな風にして、さらに一段と落ちこんだ不自由な環境に自分を適応させて行くのだった。おどろくほど短い時間で。やがて（そうなのか）と割りきった気持で彼女は立ち上り、また母親を手つだっかいがいしく小屋内のそうじにとりかかった。

この間、物置小屋のすぐ前の湿っぽい狭い空地では、平田伝作と留吉、末吉の三人が仕事場を建てにかかっていた。四隅に丸柱を立て、屋根をさびたナマコのトタンで蔽っただけのもので、小屋掛としてはもっとも粗悪なたて方だった。いくら何でも地面がじかの土間ではひどいので、後で古材木をみつめてきて、スノコ式の床を作ろうということだったが、この日はそこまでは仕事がすすまなかった。

ゆきがばさばさの万年ボウキで、小屋の中のごみをきれいに掃き出したところへ、仕事場作りを一段落させた留吉と末吉が、トタンのさびでよごした手のまま入ってきた。ゆきが言った。「二人とも、きょうはそれだけにして、フロへ行ってくるといういや」

留吉は床板に腰をおろして、地下たびをぬぎ始めながら、

「電気屋はな、あしたくるそうだから、今晚はローソクですぐすべえ」

「ああ、ひと晩ぐらいどうにでもなるさ」とゆきは事もなげに答えた。

「この小屋にゃ入口の戸がないけど、どうするんだい？」さんざん働かされていささかふきげんになっていた若い末吉は、口を尖らせて、不服そうにきいた。

「そうだな、さしあたりゴザでもさげておくか」ゆきは七輪、火箸などをへっついのみわりに

おきながらむぞうさに言った。

「うわっ、ゴザだつて！」 妙子はいかにもびっくりしたらしく、とんきような声でそう言つて、みんなの顔を見まわして笑つた。

「この入口にゴザをだらつとさげてさ、おまけにローソクつけて、みんなでご飯たべてたら、まるで……」 さすがにその先を言いかねて彼女はだまつた。

「いつか、おれが」 末吉は思い出し笑いをしながら、「明治維新の映画みたとき、その中であの桂小五郎つてのが乞食にばけてよ、四条河原の小屋にかくれているところがあつたけど、ちようどこんな小屋だつたな」 末吉は役者のサムライぶつて、ちよつと上眼づかいに小屋を見まわしてみせた。

「そうらみろ」 ゆきはいかにもわが意に叶つたと言わぬばかりの調子で言つた。

「そういうえらい人だつて、時によりや乞食小屋にでも寝おきたんだ、おれたちだつて、一生こんなとこに住むわけじゃなし、いろいろ仕事の都合で一時ここに宿借りするまでのことさ。これ以上は落ちねえから安心しろ。それにお前、今こんな思いをしてるのは、何もおれたちだけじゃない。マッカーサつて野郎にやられちゃったんで、日本人はみんなまる焼けの無一文になつたも同然だ。平田さんを見な、むかしは大旦那でいたのが、今じゃおれたちと助け合つて何とかやつてこうというまでになつちまつたじゃないか。みんな似たように大へんなんだ。今さら何をぐずぐず言うことがあるもんか。ほら、さつさとフロへ行つてこい、フロへ」

母親に言いまくられて、末吉は手ぬぐいとシャボンを探すつもりでひよいと床の上にあがつた。とたんに「イテ、テ、テ、テッ」と叫んで、片足をもちあげ、両手で押えた。

「なんだ、母ちゃん、しき物から釘が出てるじゃないか」

「釘が出てたら、打つべしさ」

そう言つてゆきは片隅の道具箱からトンカチをとつて、末吉の足もとへポンと放つてやった。そして歌でもうたうように、

「道具具ならなんでもそろつてらア、ご飯くいたきや茶わんがあるし、水をくみたきやバケツがあるよ。うちにや無いものなしさ」

*

どんなひどいあばら家でも、人は少しづつ住みなれるものだが、こんどの小屋に慣れるにはずいぶん骨が折れた。すうすうと風のふきとおす、節穴だらけの板がこいは古新聞や厚紙を張つてあるていどふせいだが、畳一じょう半ほどしかない、狭い、細ながい帆布ばりの板床に、親子四人が枕を並べてねるのはまったく大変だった。たとえば、四人が土間の方に頭をそろえて眠ると、めいめいの枕がいつのまにか土間におちてしまう。だから親たちが、頭がガクンとなつて目があくたびに、自分の枕を拾いあげたり、子どもたちのを拾つて頭にあてがつてやつたりしなければならぬ。仕方なしに、こんどはみんな土間の方へ足をむけてねることにした。あまりの寒さにゆきは夜中に目をさました。裸にされたほど寒い。半眠りの彼女は横になったまま自分の体を片手でなでまわした。掛ぶとんがなくなつてゐるのだ。ゆきはほんとうに目をさまして起きあがつた。みるとほかのものもみんな掛ぶとんがなく、うす暗い裸電球の下で互に顔をよせあい、これ以上まくなれないほど体をちぢめて眠つてゐる。みると、掛ぶとんはみんな土間にずり落ちてゐる……。